

自主研修「サタ・スタ（土曜講座）」の在り方について

宮崎県教育研修センター
指導主事 安影 亜紀

1 主題設定の理由

平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、これからの教員に求められる資質能力として、「教職生活全体を通じて、実践指導力を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」とし、学び続ける教員像を確立しようとしている。

また、宮崎県でも、平成 25 年 3 月に「教職員の資質向上実行プラン」を作成し、「～学び続けよう！！子どもたちの豊かな未来を切り拓くために～」をスローガンに、4 つの施策の内容を通して、教職員の資質を高めてきた。特に施策の内容 2 では専門性や社会性向上のために、校外での研修の充実を図ることや自己研鑽の奨励等が、具体的な取組とされた。

さらに、現在、宮崎県教育研修センターは改築中であり、これまでの教職員研修の充実や相談業務を基盤としながら、ハード・ソフト両面での機能充実をめざしている。具体的には、これまでの「教職員研修機能」など 5 つの機能に、「生涯学習・社会教育支援機能」「キャリア教育支援機能」という新たな 2 つの機能を加え、充実を図ろうとしている。

そこで、本研修センターにおいて自主研修として位置付けられている「サタ・スタ（土曜講座）」について振り返り、成果と課題を明確にして、今後の在り方について考察していきたい。

2 研究の目的

10 年目を迎える、「サタ・スタ（土曜講座）」について振り返り、成果と課題を明確にして、「生涯学習・社会教育」「キャリア教育」の支援機能を視点に、今後の在り方を考察する。

3 研究の実際

(1) 「サタ・スタ（土曜講座）」とは

教職員のニーズをとらえ、平成 18 年度から始まった事業で、県内の教職員などが自主的に参加できる研修の場を充実させることにより、参加者自らの意思による資質の向上が図られるようにした自主研修である。学校と地域・家庭との連携の観点から、保護者や一般の方々にも参加を呼びかけている。「土曜セミナー」という名称で始まり、平成 23 年度から「サタ・スタ（土曜開放講座）」となり、平成 25 年度から現在の「サタ・スタ（土曜講座）」と、名称も変わってきている。

講師への謝金・旅費は、基本的に通常の研修と同様の扱いとし、県の規定にしたがい支出している。受講する教職員は、自主研修の趣旨から、出張扱いにしていない。

(2) 年間の実施回数と受講者の推移

平成 18 年度以降多い年は、年間 5 回、少ない年でも年間 2 回実施している。

各年度の 1 回あたりの受講者数は、右のグラフのとおりである。多少の増減はあるもののここ数年は 1 回あたり 100 人程度の受講者を受け入れている。また、保護者・一般の参加は 2 割～3 割程度で推移している。

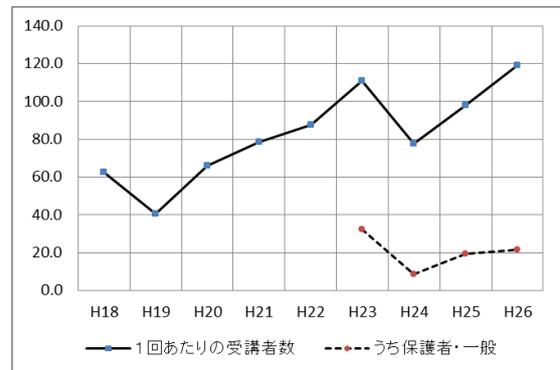


図 1 サタ・スタ（土曜講座）1 回あたりの受講者数【人】

(3) 研修講師の推移

表 1 は、講師の変遷について人数を調査したものである。最初の 3 年間は、本研修センターの指導主事や他課教育委員会関係者が講師を担っている回数が多い。

平成 20 年度からは、教職員のみを対象とした、金曜日実施の研修に招聘した県外講師に、翌日の「サタ・スタ」まで別テーマで講演していただくよう依頼した。その結果、平成 21～23 年度は、すべての講師が県外講師となった。この傾向は、現在も続いており、多くの講師を県外から招聘している。

表 1 サタ・スタ（土曜講座）講師の変遷【人】

※ 1 県内講師には指導教諭を含む

講師の推移【人】	H18 ～ H20	H21 ～ H23	H24 ～ H26
研修センター指導主事	5	0	0
他課教育委員会関係者	4	0	0
県内講師※ ¹	4	0	1
県外講師	1	7	11
計	14	7	12

(4) 受講者へのアンケート調査

平成 22 年度までは、感想を文章で記述してもらう形式であった。平成 23 年度からは、「所属」「サタ・スタをどのようにして知ったか」及び「問題解決の参考になったか」については選択肢で、「参考になった理由」「改善点」については文章で記述してもらうアンケートを実施している。

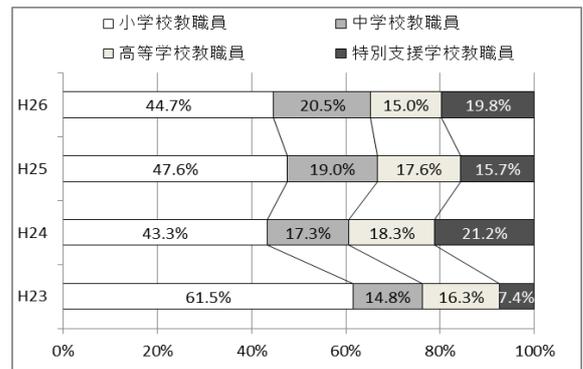


図 2 所属（学校種による参加者の推移）【%】

図 2 は、平成 23 年度からの参加者の所属の推移（アンケート回収の数）である。平成 26 年度の宮崎県の公立学校教職員数の割合は、小学校 42.1%、中学校 26.9%、高等学校 22.0%、特別支援学校 9.0% である。

毎年、特別支援教育に関係する講座を行っているため、特別支援学校の教職員の割合が若干高くなっていると思われるが、各学校種の教職員が偏ることなく、自主研修に参加していることがうかがえる。

図 3 は、「サタ・スタをどのようにして知ったか」の質問に対する回答である。

4 年間の平均で 41.0% の受講者が「チラシを見て」と答えている。新年度の案内チラシは、毎年 3 月末と 5 月中旬の 2 回、全教職員への配布を行っているためだと思わ

れる。また、この4年間で学校からの連絡で知った受講者は減っているが、研修センターのHPで知った受講者が増えている。これは、平成25年度から、宮崎県の電子申請システムを利用し、パソコン、携帯電話及びスマートフォンでも申し込めるようにした効果だと考えられる。

図4は、「問題解決等の参考になったか」について4段階の評価で回答してもらった結果である。「大変参考になった」「参考になった」と回答した受講者の割合は、どの年度も90%を超えている。1回あたりの受講者数が落ち込んだ平成24年度も、講座への満足度は高いことがうかがえる。

これまで述べてきたことから、「サタ・スタ（土曜講座）」の成果と課題として、以下の2点が浮上してきた。

まず、受講者数の推移についてである。全体の受講者は、増加する傾向にあり、学校種別の偏りもない。しかし、保護者・一般の割合は2～3割で推移しており、増加する傾向にはない。今後、「生涯学習・社会教育」「キャリア教育」の支援機能を加味するのであれば、広く学ぶ機会を提供する必要があると思われる。

次に、受講者の満足度についてである。受講した人数は少なくても、非常に満足度の高い研修もある。今後、幅広いニーズに応じた講師選定の仕方や類似した内容でのシリーズ化の検討、及び継続して研修を行う仕組み作りが必要であると思われる。

4 今後の在り方の一考察

先述したが、新教育研修センターの改築に向けての基盤整備として、「生涯学習・社会教育支援機能」等を加え、センター機能の充実を図っている。そこで、「サタ・スタ（土曜講座）」が、新たな機能に対応するためにどうあればよいか、これまで述べてきたことに加え、平成26年度に実施した、「サタ・スタ in 西都」をヒントに考えてみる。

(1) 「サタ・スタ in 西都」

宮崎県立妻高等学校出身の伊東信一郎氏（ANAホールディングス株式会社代表取締役社長：当時）を講師に迎え、平成26年11月1日（土）に西都市民会館にて実施した。

対象を高校生と教職員に限定したことや、伊東社長の講演後に妻高生徒との対談を実施したことが従来の「サタ・スタ（土曜講座）」との大きな違いである。（図5）

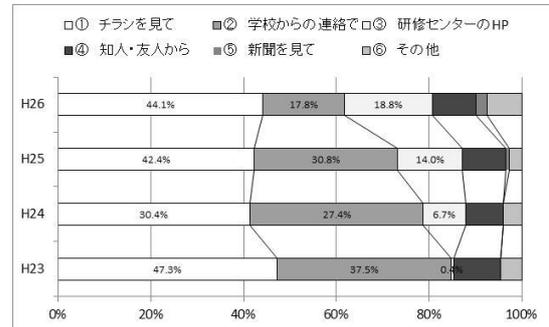


図3 サタ・スタをどのようにして知ったか【%】

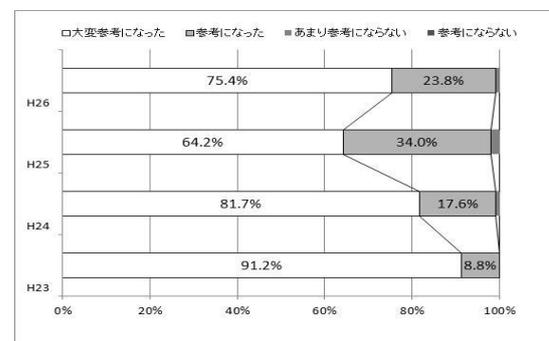


図4 問題解決等の参考になったか【%】



図5 サタ・スタ in 西都 対談の様子
（写真：妻高等学校ブログより）

※詳しくは、妻高等学校ブログ参照

<http://tsuma.call-t.com/?day=20141107>

実施後に、妻高等学校の生徒へ意識調査を行った。その結果は、図6・7のとおりである。

「卒業後や将来の生き方について考えるきっかけになったと思う」と回答した生徒が、すべての学年で95%を超えた。また、「西都（宮崎）に対する愛着が深まったと思う」と回答した生徒も、第3学年・第1学年では90%を超えている。西都（宮崎）に愛着が深まったのはもちろんであるが、卒業後や自分の将来の生き方について考えるきっかけを与えることにつながったことが分かる。

さらに、学年で比較すると、どちらの質問に対しても、3年生の生徒が一番多く「とてもそう思う」と回答している。

3年生は、進学・就職を目前に控えており、これまで一緒に過ごしてきた仲間が、県内外で別々の人生を歩むことを、日々の学校生活で実感しつつある。講演・対談を聞くことで、将来のことや郷土への思いを自分のこととしてとらえ、より深く考えることにつながったのではないかと思われる。

(2) 今後の在り方

「サタ・スタ」の今後の在り方を考えると、新たなセンター機能の充実に、2つの点で貢献できるのではないかと考えている。

1点目は、「生涯学習・社会教育支援」に関する内容である。これまで主として、教職員を対象としており、その内容や講師に関心がある保護者・一般の方も、参加を可能としてきた。今後は、毎回、教育課題や教職員のニーズに合わせた内容・講師選定だけでなく、幅広い年齢層や領域の内容を加味する回を設けることで、あらゆる県民の学びを支援できる機能が備わるのではないかと考えられる。

2点目は、「キャリア教育支援」に関する内容である。1点目にも関連するが、教職員、保護者、及び児童生徒等も自由に参加できる回を設けることで、キャリア教育の「体験活動」として「サタ・スタ（土曜講座）」を位置付けられないか考えている。

各学校が、キャリア教育を推進するための1つの教材として「サタ・スタ（土曜講座）」を利用できる環境を整えることで、可能性を広げることができると思われる。

5 おわりに

今後の在り方で記述した2点を実現するためには、積極的な広報活動やどのように各学校のカリキュラムに組み込むか等、多くの課題がある。しかし、これまでの10年間で蓄えた自主研修のノウハウを生かし、新センターにふさわしい「サタ・スタ（土曜講座）」にできる可能性は十分にあると考える。

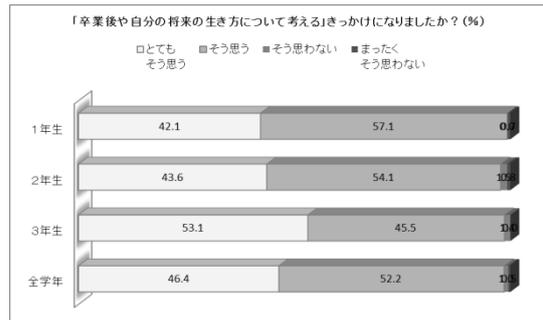


図6 高校生への意識調査①

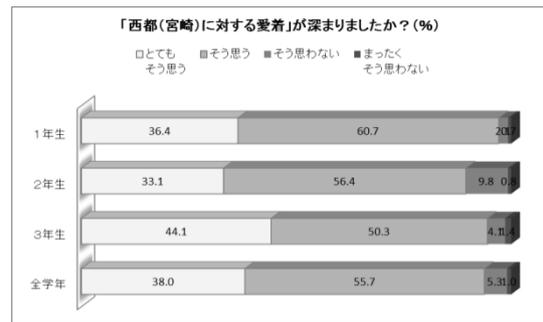


図7 高校生への意識調査②